

最優秀賞（小学校3・4年生の部）

「どっちでもいい子」を読んで
（課題図書：どっちでもいい子）【感想文】

つくば市立みどりの学園義務教育学校 4年 熊崎^{くまさき} 清人^{きよと}

ぼくが、この本をえらんだきっかけは、内ようが面白かったからです。主人公のはるちゃんという女の子が最初はおとなしくて目立たない子なのに、れいなちゃんというお友達ができて少しずつなりたい自分が分かってきて変わっていくことがすごいと思いました。

そのはるちゃんは、どっちでもいい子と言われていて、いてもいなくてもどっちでもいい子とされています。例えば学級会で、A案とB案が出てどちらかを決めるときに、手を挙げるができない子です。でも、はるちゃん本当は考えれば考えるほど分からなくなって決められなくなってしまっています。

ぼくのクラスでは、毎日グループを何回か作って話し合ってみんな意見を聞くことができます。先生は、面白くて頭がいいクラスを目指しています。

ぼくは冬休みSDGsのワークショップに参加しました。そのグループは全員四年生でしたが、六人の内四人は、他の学校から来た子達でした。話し合いを始める前は会話が成り立っていたので学校のようにまとめられるのかと思っていましたが、話し合いが始まるとみんなが意見をゆずらないから話し合いがなかなか進みませんでした。仮説を立てるのにも、二つの意見に分かれてしまって決めるのにも時間がかかりました。ぼくはその時自分が意見を言っても聞いてもらえないことがあってくやしい気持ちになりました。

ぼくはこの本を読んでどっちでもいい子と、意見をゆずらない子はどっちの方がいいのか考えました。もしも、話し合いの時にどっちでもいいと言っていたら、それは遠りよしているのか考え直しているのかどっちかが気になります。遠りよしているのなら、せっかくの自分の意見をあきらめていることになるのもったいないと思います。

でもぼくらはSDGsのワークショップで意見をゆずってしまったので次は意見をゆずりたくないと思っているとお父さんが

「意見を通すことは、手だんであって、目標ではないよ。」

と言いました。始めにみんなの意見を聞いて整理して話し合うことは正しいやり方だったことを教えてくれました。このワークショップの目標は、まずは正しく理解することで次に他の人たちに分かりやすく説明をすることだと分かりました。

ぼくは意見がちがう人達と同じグループになって話し合いをすることができてたくさんを教えてもらったと思いました。本の中ではるちゃんが

「いいこともいやなことも、そのつみかさねでいまの私がある」

と言っていたように、ぼくもこれからいろんなけいけんをしてこれからの自分を作っていきたいと思いました。